

(様式5)

視察報告書

令和 5 年 11 月 16 日

鳥取市議会議長 西村 紳一郎 様

鳥取市議会 公明党鳥取市議団

水口 誠



令和 5 年 11 月 8 日～ 11 月 10 日まで鳥取市議会公明党市議団視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

視察 1 日目 秋田県藤里町社会福祉協議会 福祉の拠点「こみっと」に視察

地域福祉としての考え方（藤里町）①一人の不幸も見逃さない運動②トータルケア推進事業③活躍支援だから出来た「こみっと」支援事業④福祉の立場からの地方創成事業の話を聞かせていただきました。

所見:

・①の一人の不幸も見逃さない運動として、地域の方々を支援する側、される側に分けることの矛盾と弊害を疑問視し、不幸な人を見つけ出す運動からの脱却しようと誰もが困ったと声を出せる地域づくり運動をされておられ、一人ひとりを大切にされ対応されておられると感じました。

・特に福祉といえば高齢者や障がい者を連想するところですが、藤里町では次世代の担い手づくりとして、若者支援（ひきこもり者、長期不就労者、在宅障がい者等の支援）に力をいれておられ、これからの福祉の考え方が変わってきていると感じました。

・藤里町の福祉の取組によって、ひきこもり者の数もかなり減ってきているということでした。「こみっと」の支援事業の中の一つにお食事処「こみっと」での就労支援や、白神まいたけキッシュでの就労支援があり、この度の視察で、昼食をいただき、就労支援を受けておられる皆さんに接待していただきました。皆さん緊張しながらも、就労に向けて頑張っておられました。また、「こみっと」バ

ンクとして地域での活動を支援しておられ、様々な活動の支援をしておられる。特に福祉の立場からの地方創生、システムづくりとして弱者も地方創生の担い手として活躍するプラチナバンク（人づくり）や根っこ※わらびビジネスで、伝統の味の製品化（仕事づくり）や若者支援を3本柱として町民すべてが生涯現役を目差し取り組んでおられる。プラチナバンクには、400人を超える人が登録している。（町民の8人に1人）。活動を通して生きがいや、やりがいを感じられる事業を展開しておられ、鳥取市でも見習うべきことが沢山ありました。

視察2日目、せんだい3.11メモリアル交流館にて、当時の震災の状況について

当事者（語り部）の方にお聞きしました。震災と復興の記憶として当時撮られた写真の展示を見ながら、説明をしていただきました。話を聞きながら、ご家族やご友人と生き別れ、悲しい思いをされておられる方に、掛ける言葉も選びながら前を向いて進む姿に感動いたしました。また、震災から12年が経過し、大きく生活も変わったという話も聞きました。被害が大きかった地域の多くは、住宅地として家を建てるのが出来なくなってしまい、元あった場所には戻れなくなってしまったということでした。その跡地では、企業誘致や農業、レジャー施設などが徐々にでき始め、有効な土地利用がなされていて新たな街並みが形成されていました。さらに、震災の教訓も生かし、堤防の嵩上げや県道の盛り土工法で内陸部への海水流入を防ぐ工夫がされていました。まだまだ、話は続きましたが、場所を移動し昼食後に、実際に現地近くにある**震災遺構仙台市立荒浜小学校を訪ね現地視察**をさせていただきました。震災後、記憶をとどめておきたいと残されたそうですが、当時の爪痕がそのままの形で残しており、津波の怖さ、すさまじさをまじまじと拝見させてもらいました。所どころ小学校を案内してくれたのが現役の中学生（震災当時は2歳か3歳）で、こうやって継承されていくんだなと思いました。さらに、震災当時の映像や校長先生や教頭先生、さらに近くの町内会長の証言なども聞かせて頂き、とにかく目の前で何が起きているのかわからな

くなるほど、冷静ではいられなかった様でした。その中でも、校長先生や教頭先生が起点をきかせ、指揮をとられていたそうです。これには、重ねてきた避難訓練が生かされたそうです。やはり、計画的に避難訓練することは大切なんだとあらためて感じました。その後、場所を仙台市役所に移し、街づくり政策局防災環境都市推進室の担当課の職員にお世話になり、防災環境都市づくりについて、お話を伺いました。中では環境づくりの歴史や大地震の経験・教訓と震災復興計画等を学ばせていただきました。環境づくりでは、ライフラインの強靱化（防災性・環境配慮機能の強化）、指定避難所のエネルギー対策、津波防災（多重防御）に力を入れておられ、人づくりの話の中では、地域の特性を踏まえた防災・減災の取り組み、防災教育の推進、地域防災リーダー育成、防災枠組み講座の開催、防災未来フォーラムの開催、職員間伝承など多くの取り組みがありました。話の中で、「環境」をつくることも大事だが「人」をつくること（人材育成）も大事だということを聞かせて頂きました。実際運営するのは「人」だということです。最後に情報伝達の取り組みについての話の中で、避難所の開設はどのようにされているのかをお聞きしたところ、基本は職員が開設しますが、開設が遅れることも考慮し、地元近くの職員もしくは地域の自治会の方が開設することもあるということでした。避難者が居るのに開設されないのはおかしいので、今回の鳥取市で起きた台風7号の災害の際、避難所の開設が遅かったことを教訓に見直したほうが良いのではと感じました。

視察3日目 姉妹都市でもある郡山市 ペップキッズこおりやまに視察に行き、この施設がつくられた経緯と運営状況、課題などをお聞きしました。

初めにこの施設が作られた経緯をお聞きしました。震災後、郡山市震災後子ども心のケアプロジェクトが発足され、震災年8月に夏のキッズフェスタを開催し、福島から日本の子どもたちを元気にしたいと、3カ月後の12月にペップキッズこおりやまをオープンさせたそうです。たった3カ月でオープン出来たのは

、建物の提供と改装費等を出資された、現在も副理事長でもあらある、株式会社蔵場の菊池 亮介氏と関係者団体の協力もあったとお聞きしました。その後、土地建物を認定 NPO 法人 郡山ペップ子育てネットワーク（理事長、菊池 信太郎氏※小児科医）が請け負い現在の運営をされておられます。オープンした時が 12 月 23 日ということもあって、はじめは、クリスマスイベントをされたそうです。プレゼントも同業者や卸売業者にも協力して頂いたそうです。また、ペップ屋内にある物のほとんどが、寄付によるものだとお聞きしました。かなりの設備だったので驚きました。その中でもやはりコロナの影響はかなりのものだったそうです。密を避けるための対策や人数制限、遊び場の消毒や遊び場によっては、閉鎖も余儀なくせれるなど、苦労があったそうです。令和 5 年度、コロナも 5 類に移行し、利用者も徐々に増えはじめ、視時察にはたくさん子どもたちが元気いっぱい遊んでいました。子どもたちの笑顔を見ていると、何かほっこりとした気持ちになりました。たくさん子どもたちが遊べるよう、時間を区切って入れ替えをして工夫もなされていました。遊び場では、近くで保護者が見ておられ、また、スタッフも数名見守ったり、一緒に遊んだり安全にまた安心して利用できる環境になっていました。また、その他にも、小さな子供が遊べるスペースやキッチン（子供たちがつくるクッキングスペース※予約制でいろんなものが作れる。作り終えたら、食べることができる）スペースがあり、とても楽しく過ごせる施設でした。令和 5 年度今現在で大人、子供併せて利用者が 290 万人を超えたそうです。その利用者の殆どが郡山市からで、全国からも利用があるそうです。これからの課題として、いわれていたのが財政面で、今は復興交付金（10/10）1 億円があるが、今現在、無料で利用していただいているが、復興交付金もいつまであるかわからない。今後も無料で使っていただきたい思いはあるが、そのところが不安でもある。（市や県に補助を求めないときびしくなる・・・）ということです。※現在も経常収益（正会員受取会員・賛助会員受取会費、受取寄付金、委託金他）から経常費用 事務費・管理費（人件費・その他経費）を引いた

ら2,000（千）ほどの赤字になっている。改善の必要があるとのことでした。

事業そのものは、とても素晴らしいと感じました。現実的に、本市で同じ様な事業を行うにはハードルが高いと私は感じました。しかしながら、子どもの遊び場が少ないという声があります。特に屋内で遊ぶことのできる施設が本市にはあまりないので、子どもたちが思いっきり遊べる施設がどこかに1つあっても良いと感じました。

以上

(様式5)

視 察 報 告 書 (委員用)

令和5年 11月 15日

鳥取市議会議長 西村 紳一郎 様

鳥取市議会公明党市議団

谷口 明子 ㊞

令和5年11月8日から令和5年11月10日まで鳥取市議会公明党市議団の行政視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：

秋田県藤里町行政視察

- ・大変、共感できることの多い視察でした。
- ・支援する側、される側に分けることとか、不幸な人を見つけ出すことの矛盾、弊害を分析し、そこから支援する人、される人を隔てない、トータルケア推進事業を開始、実行されたところが素晴らしいと思いました。
- ・役場職員、JA職員などの同級生、知人に、だれが紹介したのかを案内OKにして、該当者の方々の家に訪問し、活躍支援の勧誘ではなく、情報提供のみとし、いつでも参加OKとされたことが素晴らしい。また、それを可能としている、幼いころからのコミュニティー、信頼関係ができていることに感動しました。本市の市街地域では難しいと思われますが、新市域の中では可能なのところもあるのではないかと思います。
- ・救済型福祉から活躍支援型福祉への転換、高齢者、障がい者だけでなく、所属を持たない若者層も含めた、全世代型活躍支援事業のプラチナバンク事業、誰もが地域の役に立ちたいという思いに寄り添い、実現しようとしているこ

の事業を各地で展開できれば、皆がいきいきと暮らしていけるのではないかと
思います。しかし、そのためには、各地域でのコミュニティー、信頼関係づく
りがとても大切かと感じました。

宮城県仙台市視察

・改めて、東日本大震災の被害の甚大さを目の当たりにし、この被害状況、その、
復興の取り組みを風化させてはいけないと思いました。地元の方だけではなく
わが国全体で伝承し、今後の防災に活かしていかななくてはと感じました。

・地域の特性を踏まえた防災・減災の取り組みの中で、段ボールジオラマづくり
を通しての教育は素晴らしいと感じました。住んでいる地域の地形、注視する箇
所が立体で分かることができ、防災教育のために、子どもも大人も取り組めたら
よいと思いました。

・防災リーダー育成の取り組み、女性目線での防災、避難所運営、職員間の伝承、
スキルアップの取り組み、とても重要であると感じました。本市の取り組みに活
かしていければと思いました。

・本市でも本年8月の台風7号の甚大な災害が起きましたが、仙台市における災
害復興の取り組みを、本市にも活かせれないかを今後も学んでいきたいと思いま
した。

福島県郡山市郡山ペップ子育てネットワーク視察

・市街地の中で、赤ちゃんから小学生の子どもたちが、のびのびと遊び学べる屋
内施設があることにまず感動しました。駐車場も十分あり、ペップアクティブは
無料、ペップキッチンは予約制で材料費のみというところ、大変素晴らしいと感
じました。

・実際、見学させていただきますと、子どもたちが、いきいきと楽しく遊んでい
るところを目の当たりにし、見ているこちらもうれしく元気になりました。

・ペップアクティブでは、プレイリーダーの方がしっかりと子どもたちを見ておられ、安心して遊べる環境づくり、対応をされており、素晴らしいと感じました。

・ペップキッチンの会場は見学しましたが、実際行っている現場は丁度行われていなくて見学できず残念でした。子どもたちが五感を通して季節の野菜や果物を中心とした食材を実際調理し、自分の調理したものを食べるという、楽しい現場であり、食育に大変役立つものかと思います。調理服、コックさん帽子など、“料理ごっこ”が、“ほんもの”になったもので、こどもにとって、とてもわくわくするものだと思います。施設が子ども仕様になっており、スタッフがしっかりとついておられるので、子どもも親も安心して参加できる、自宅ではできないことができる、素晴らしい施設だと感じました。

・東日本大震災で大きな被害がありました福島県において、『福島の子どもたちを日本一元気に！』という熱い思いの詰まった、思いの伝わる、素敵な施設でした。やはり、その熱い思いから、このような素晴らしい施設ができあがり、運営しておられることに感動しました。本市も未来につながる子供たちのために、という熱い思いで、このような施設ができればと強く思いました。

(様式5)

視 察 報 告 書

令和5年11月15日

鳥取市議会議長 西村 紳一郎 様

鳥取市議会 公明党鳥取市議団

浅 野 博 文 印

令和5年11月8日～11月10日まで鳥取市議会公明党市議団の視察(調査)に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：

1日目11月8日(水)：秋田県 藤里町社会福祉協議会 福祉の拠点こみっと
「引きこもり対策・支援について」

◎藤里町社会福祉協議会 菊池まゆみ会長から「藤里方式」による活動支援事業の展開について説明を受ける。

- ① 1990年～一人の不幸も見逃さない運動(ネットワーク活動支援)
 - ・地方の方々を支援する側と支援される側に分けることの矛盾と弊害⇒不幸な人を見つけ出す運動からの脱却。**誰もが困ったと声を出せる地域づくり運動へ**
- ② 2005年～「福祉でまちづくり」を合言葉に、支援する人支援される人を隔てないトータルケア推進事業を開始
 - ・対象を高齢者や障がい者等を想定していたが、それ以上に、**所属する場所を持たない若者層支援が急務**と感じた。
- ③ 2010年～「こみっと」における活動支援事業(ひきこもり者及び長期不就労者及び在宅障がい者等支援事業)開始
 - ・地域ぐるみで支える場、誰もがキャリアアップ・キャリアチェンジを目指す場を目指した。
 - ・情報提供のための家庭訪問⇒人口4000人の町で113人が対象者名簿に載ることを了承。そのほとんどが家から出て、研修事業を含む「こみっと」支援により、8割以上が一般就労を果たす。
 - ・市町村単位でなく、広域での多様な展開が必要。
 - ・**救済型福祉から活躍支援型福祉への転換が急務**。
- ④ 2015年～福祉の立場からの地方創生事業(全世代対応の活躍支援事業)の開始
 - ・**プラチナバンク事業**が、町民の注目度・関心度の高い事業になり、プラチナバンクスタッフが大きな役割を果たしている。

◎第3期藤里町福祉活動計画（でらっとプランⅢ）などの事前質問等に丁寧に分かり易く回答していただく。また菊池会長の藤里方式による活躍支援の熱意を直接感じる事ができた。

◎印象に残ったことは、引きこもりだと思われる方の情報を同窓会の繋がりや、町の職員や社会福祉協議会の職員などから吸い上げて、最初は会長ともう一人の2名で、1件1件訪問して対象者名簿に掲載の承諾をもらったとの苦労話です。また、引きこもりと思われていたが、実際には孤独・孤立対策としての活躍支援によって就労等に繋がったとの事です。

2日目11月9日（木）：宮城県 仙台市議会

「防災環境都市づくりについて」

◎午前中：せんだい3・11メモリアル交流館を視察。1F交流スペースでは交流係の芝原様から展示物や映像で津波被害の状況の説明を受ける。次に、2F展示室ではボランティアガイドから復興の歴史をお聞きする。

- ・立体地図は被害状況がよく分かるように工夫していた。
- ・ガイドの方も被災されていて、実感がこもったお話が聞けて良かった。

◎午後（1）：震災遺構の仙台市立荒浜小学校を視察。震災メモリアル事業担当課長の田中様と中学生ボランティアガイドに案内していただく。

- ・被害当時の生々しい爪跡を目の当たりに感じる事ができた。
- ・荒浜小学校の当時の校長先生の避難判断や防災意識の高さを知ることができた。

◎午後（2）：仙台市議会 仙台市まちづくり政策局 防災環境都市推進室を視察。室長の菅原様等から防災環境都市づくりについて資料などを使って説明を受ける。

- ①防災環境都市づくりの背景について
- ② 防災環境都市づくりについて
- ③ 「まちづくり」の取り組みについて
- ④ 「ひとづくり」の取り組みについて
- ⑤ 情報発信の取り組みについて

その後、市民のための「仙台防災枠組み 2015-2030」や「仙台市震災復興計画」等に関する事前質問に分かり易く回答していただく。

- ・「ビルド・バック・ベター（より良い復興）」の考え方は素晴らしいと感じた。
- ・実体験から公助に頼り過ぎないことが重要であると考え、地域ごとに地域の特性を踏まえた防災・減災の取り組みを実践している。中でもダンボールジョラマを活用していることが素晴らしいと感じた。この作成費用を商工会議所等が助成している。
- ・仙台版防災教育の推進に取り組んでいる。「3・11から未来へ」を小学校1. 2. 3年版、小学校4. 5. 6年版、中学校版を作成し、学習している。
- ・まちづくりの取り組みでは、津波防災として新しくかさ上げ道路を建設するなどの多重防御を取り入れている。
- ・被災当時も現在も仙台市長は女性であり、防災や避難所運営には女性をはじめ多様な意見を聞くことが重要との話があり、全くその通りだと感じた。

- ・「仙台防災枠組み 2015-2030」では仙台市がリードして世界に発信していることが素晴らしいと感じた。

3 日目 11 月 10 日（金）：福島県 郡山市議会

「ペップキッズこおりやまについて」

◎郡山市こども部こども家庭未来課 子育て事業係長 兼子様と、認定 NPO 法人郡山ペップ子育てネットワーク 事務局長 市川様から説明を受ける。

- ・活動報告書「わたしたちの歩み」を使って 5 つの事業を中心にした活動内容などのお話を聞く。

- ①調査研究事業
- ②身体のカア事業
- ③ 心のカア事業
- ④ 人づくり事業
- ⑤ 居場所づくり事業

- ・認定 NPO 法人郡山ペップ子育てネットワークは平成 24 年 5 月に発足。それは「**福島の子どもたちを日本一元気に！**」のスローガンのもと、東日本大震災直後の低線量放射線環境下に生きる福島の子どもたちを、地域の大人がどう守り、どう育ていけば良いかを実践するためのモデルを創ろうと考えたからでした。

- ・「郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクト」等に関しての事前質問にも詳しく答えていただく。

- ・「ペップキッズこおりやま」建設に当たっては民間企業の株式会社ヨークベニマルの強力な支援があり、屋内遊び場設置準備委員会設立、着工開始から**わずか3 か月でオープン**できたことに驚いた。また株式会社ヨークベニマルの大高社長が夏のキッズフェスタ開催のニュースを**たまたま観たことから**、「地域社会の皆様のお役に立つ」という創業の心と企業理念と相通じるものがあり、会社の土地、建物を無償提供し、関連会社等にも協力依頼して建設費用も自費で捻出されたことに感動しました。その後運営はしばらくの間、市の方で行われたとのこと。

- ・今後の「ペップキッズこおりやま」の課題としては、現在までは国からの復興交付金 10/10 で年間約 1 億円の運営費用を賄っているが、引き続きの支援があるか心配しているとのこと。（現在まで入館料は無料。）

- ・コロナ禍の期間は利用者数が激減した。

- ・「ペップキッズこおりやま」の館内を案内して頂いた。各コーナーにはそれぞれプレーリーダーが配置されており、安全対策が取られていた。またこどもたちが楽しそうに声を上げながら走り回っていて、とても感動した。

以上

(様式5)

視 察 報 告 書 (委員用)

2023 年 11 月 24 日

鳥取市議会議長 西村 紳一郎 様

鳥取市議会 公明党鳥取市議団

委員 平野真理子 ㊞

令和5年11月8日から令和5年11月10日まで鳥取市議会 公明党鳥取市議団の視察(調査)に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：

ひきこもり対策・支援について (藤里町社会福祉協議会)

・秋田県山本郡藤里町藤琴字三ツ谷脇にある、「福祉の拠点こみっと」に行き、ひきこもり・不就労・障がい等の方々が社会復帰のために活動され、また、それを支える方々の取り組みを伺った。

・説明されたのは、社会福祉協議会の菊池まゆみ会長。
藤里町は人口 2,869 人、世帯数 1,310 世帯、65 歳以上 1,429 人、高齢化率 49.8%の町。
社協の予算は令和5年度3億2千万円。職員数 45 人。

・1990 年から一人の不幸も見逃さない運動 (ネットワーク活動推進事業)。
地域の方々を支援する側とされる側に分けることはおかしいんじゃないのと矛盾と弊害を感じ、不幸な人を見つけ出す運動から脱却し、誰もが困ったと声を出せる地域づくりをすすめた。

・2005 年から「福祉でまちづくり」を合言葉に、支援する人される人を隔てない地域トータルケア推進事業を開始。「藤里方式」では、支援が必要な人は支援する側にもなれるという思いに寄り添う支援を実施。その対象を高齢者や障がい者等を想定していたが、それ以上に、所属する場所を持たない若者層支援が多く、高齢者よりも次世代の担い手づくりに力を入れることが急務と感じた。

・2010 年から「こみっと」における活躍支援事業を開始 (ひきこもり者及び長期不就労者及び在宅障がい者等支援事業)。
こみっとの情報提供するため生活困難者を家庭訪問し、人口 4000 人の町で 113 人が対象者名簿に載ることを了承。そのほとんどが家から出て、研修事業を含む「こみっと」支援により、8 割以上が一般就労を果たしている。
このころから、救済型福祉から活躍支援型福祉への転換。

・主な「こみっと」支援事業は、いつでもどこでもだれでも OK

- 1) 週 1 回のレクリエーション活動
- 2) 「こみっと」共同事業所でのパソコン等操作訓練
- 3) お食事処「こみっと」での就労訓練
- 4) 「こみっと」バンクとしての地域での活動

・2015 年から福祉の立場からの地方創生事業、全世代対応の活躍推進事業の開始。
プラチナバンク事業が、町民の注目度・関心度の高い事業になり、プラチナバンク
スタッフが大きな役割を果たしている。

<感想>

様々な推進事業をされてこられた様子を伺いながら、地に足が着いた取り組みをされているのが良く分かった。ひきこもりがちな方に情報提供するため家庭訪問をされた話では、同窓生の公務員や社協職員など自分の名前出していいからと、紹介してくれたことやひきこもっている人は、外の情報が欲しいと思っている、そこからただ情報を持ってくるだけの訪問を繰り返しながら「こみっと」活動に繋がったとの話に、足を運ぶことの大切さを学んだ。

若い人は、ほんのちょっとしたことを大きく受け止め、もう駄目だ、無理だと思い込んでしまう。能力があっても経験を積むことがない。いろんな場所が必要だが、だからといって福祉のお世話になりたくない、こう思っている。

町民の困っていることを全部受け止めていくなど、言葉の端々に支援される側にたった思いがあふれていた気がした。鳥取市の取り組みにも大変参考になった。

防災環境都市づくりについて（仙台市議会）

仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室長から説明をしていただいた。

・背景は 2011.3 東日本大震災による甚大な被害
2015.3「第 3 回国連防災世界会議」開催され「仙台防災枠組 2015-2030」採択。SDGs・パリ協定と並ぶグローバルアジェンダ。
2023.5「仙台防災枠組実施状況の中間評価にかかる国連ハイレベル会合」開催。
郡仙台市長が仙台市の防災・減災の取り組み等を発表。

・防災環境都市づくりについて、防災性（強靱さ、回復力）、脱炭素（地球環境）、快適性（生活環境・自然環境・都市環境）を合わせた、国内外から選ばれる都市・世界への防災文化への貢献。

・「まちづくり」の取り組みについて、ライフラインの強靱化では南蒲生浄化センターを復旧し、防災性や環境配慮機能を強化し、指定避難所のエネルギー対策では 200 ヶ所の小中学校全てに蓄電池等を設置、津波防災では命を守る最優先しての多重防御の取り組みを推進。

「ひとづくり」の取り組みについて、地域の特性を踏まえた防災（山から海などリスクが異なる、女性の活躍）・減災の取り組みや仙台防災教育の推進、防災リーダーの育成、職員間伝承など。

・情報発信の取り組みについて、震災遺構の保存、メモリアル交流館の運営、震災記

録誌等の発行、視察の受け入れ、国際会議での発信。

<感想>

東日本大震災後の都市づくりについて学ぶことができた。

交流館や震災遺構仙台市立荒浜小学校の見学したことにより、視察先の説明が深まることに繋がった。女性の視点について、避難所で女性の声が届きにくかったことがあった中で、当時の仙台市長が女性であったことから、女性の職員を行かせたり、直接女性の意見を聞くよう指示されたと伺った。大切なことは教訓を忘れないことだとも話された。鳥取市においても女性の視点など、被災された地域、人たちの声を自分事として防災・減災対策に当たることが大切だと思った。今後、防災対策をしていく上で大変参考になった。

ペップキッズこおりやまについて（郡山市議会）

認定 NPO 法人郡山ペップ子育てネットワークの運営するペップキッズこおりやまに行き、福島の子どもたちを日本一元気に！を実現する取り組みを伺った。

この NPO は、東日本大震災直後の低線量放射線環境下に生きる福島の子どもたちを守り、育んでいくため平成 24 年 5 月に発足した法人。

・事業では、①体力テスト、②生活習慣アンケート、③肥満調査など行ったこれらの結果を 7 年間にわたって専門家が解析し、子どもの生育環境がどのように体力・運動能力への影響・肥満や痩せに影響するのか研究するとともに、結果等について各施設に情報提供している。

・ペップキッズこおりやまは、東日本大震災発生後郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクト発足。9 月屋内遊び場設置準備委員会設立、ペップキッズ着工開始、12 月ペップキッズこおりやまがオープン。わずか 3 か月の工事。

<感想>

砂場や三輪車、料理もできて十分に楽しめる施設で、子どもたちが思う存分動けて、楽しむ様子を見ることができた。

外に出ることができない状況下において、室内で動ける遊び場づくりに取り組まれ 10 年が過ぎ、器具などの更新が課題となっていた。

(様式2)
別紙

視 察 報 告 書 (委員用)

令和 5 年 11 月 21 日

鳥取市議会議長 西村 紳一郎 様

公明党鳥取市議団

議員 石田憲太郎 ⑩

令和 5 年 11 月 8 日から 5 年 11 月 10 日まで公明党鳥取市議団の視察(調査)に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：

■秋田県藤里町社会福祉協議会

1. 引きこもり対策・支援について

藤里町社会福祉協議会は、「地域福祉」についての取り組みを「藤里方式」として独自展開されている。

その経緯は、平成 2 年秋田県のネットワーク活動事業として「一人の不幸も見逃さない運動を開始。「誰もが困ったと声を出せる地域づくり運動」が開始される。その後平成 14 年から 5 年間のモデル事業として「福祉でまちづくり」を合言葉に、支援する人される人を隔てないトータルケア推進事業を開始。藤里町社会福祉協議会では、支援が必要な人は支援する側にもなれるという発想で、地域の役に立ちたいという思いに寄り添う支援を実施。その際対象者を高齢者や障がい者等を想定していたが、実際は所属場所のない若者が多い実態が明らかとなった。そこで、モデル事業終了後の平成 22 年、福祉の拠点「こみっと」を開設し、活躍支援事業(引きこもり者及び長期不就労者及び在宅障がい者等支援事業)を開始。福祉の拠点は「地域ぐるみで支える場、誰もがキャリアアップ・キャリアチェンジを目指せる場」を目指す。その後、平成 27 年には福祉の立場からの地方創生を考え、「町民全てが生涯現役を目指せる町づくり」に取り組み、人づくりの仕組みとして「プラチナバンク」事業を設置。会員が可能な働き方を登録し、仕事づくり事業の中で活躍していただける場を創出しながら現在に

至っている。

今回「藤里方式」の地域福祉の取り組みを伺って、私自身これまで福祉施策といえば当事者に対して「何がしてあげられるのだろうか？」という、ある意味上から目線的な捉え方をしていたのではないかと気付かされた気がした。説明をいただき分かったのは、引きこもりの方の多くが求職情報等の様々な情報提供を望んでいたこと。そして、福祉の世話にはなりたくない方が多く、支えてもらう暮らしではなく当たり前の社会生活を取り戻すことであるということ。素晴らしい取り組みの「藤里方式」も、人口規模でそのまま本市で展開するには課題があると思われるが、取り入れるべき取り組みであると強く感じた。今後、引きこもり課題に対する考え方の転換ができたことは大きな収穫であったと思う。

■宮城県仙台市

1. せんだい 3.11 メモリアル交流館(現地視察)

地下鉄東西線荒井駅駅舎に併設されており、公益財団法人仙台市市民文化事業団が仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室から受託し運営を行っている。東日本大震災を知り学ぶための場であり、交流スペースや展示室、スタジオといった機能を設けている。

被災地がどういう場所であったのか、そして被災の実相、復興への軌跡を語り継いでいく拠点であり、記憶にとどめる大切な施設と感じた。

■宮城県仙台市

1. 震災遺構仙台市立荒浜小学校(現地視察)

3.11 東日本大震災で被災した仙台市立荒浜小学校は、被災の痕跡が鮮明に残されていることから、震災遺構として保存・整備されている。被災直後の様子を示す展示等により、来館者に津波の威力や脅威を実感していただくことで防災、減災の意識を高めていただくことを目的としている。

荒浜地区の津波被害を発生から避難、津波襲来、救助までの経過を写真、映像で紹介されている。

唯一残ったともいえる小学校の屋上から、被災前後の地区の状況を直に確認できることで、津波の脅威を実感できる貴重な遺構といえる。被災現場にわが身を置いて感じられる津波の脅威は、来館者の意識に永く留められるものであり、貴重な施設と感じた。

■宮城県仙台市

1. 防災環境都市づくりについて

仙台市の防災環境都市づくりの背景としては、東日本大震災後の2015年3月に行われた「第3回国連防災世界会議」にて「仙台防災枠組2015-2030」が採択されたことに始まる。これは、SDGs、パリ協定に並ぶ3大グローバルアジェンダである。防災環境都市づくりの施策には、防災環境まちづくり、防災環境ひとづくり、経験と教訓の伝承の3つの柱が掲げられている。

1. まちづくりの取り組みについて

- ・ライフラインの強靱化

防災性・環境配慮機能の強化

- ・指定避難所のエネルギー対策

防災対応型太陽光発電システムの導入

- ・津波防災

海岸堤防、防災林、避難の丘、かさ上げ道路、内陸への高台移転等を組み合わせた多重防御

2. ひとづくりの取り組みについて

- ・仙台版防災教育の推進

4年から5年の一学年のカリキュラムに取り入れ

- ・仙台市地域防災リーダー（SBL）の育成

- ・仙台防災枠組講座の開催

- ・仙台防災未来フォーラムの開催

- ・行政の職員間伝承（現在は職員の半数以上が震災後の入庁）

3. 情報発信の取り組み ※記憶の継承

- ・震災遺構の保存・活用

- ・3.11メモリアル交流施設の運営

- ・震災記録誌等の発行

- ・視察の受入れ

- ・国際会議での発信

未曾有の大災害を受けた仙台市の実践防災の取り組みを、肌感覚で実感することは難しいが、特に防災環境ひとづくりの取り組みでは防災教育、防災リーダーの育成、そして、被災対応の実践体験を未経験職員へ伝承することで、将来の災害対応につなげる取り組みの重要性を感じた。

■福島県郡山市

1. ペップキッズこおりやまについて(現地視察)

当施設が設立されるに至った経緯は、平成 23 年の東日本大震災という自然災害に加えて原発の放射能汚染によって屋外での活動ができなくなるという日常の喪失が、子どもたちの心身に大きな影響を与えたことに始まる。子どもたちにいつもの日常を！と、小児科医であった菊池医師が「郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクト」を発足し、同年 8 月に 3 日間のキッズフェスタを開催したところ、フェスタを見た地元大手スーパーの社長より、震災にあった子どもたちが心身ともに健康で安心して居られる場所を作ろうということで、3 か月という短期間で「ペップキッズこおりやま」を 12 月にオープンさせた。

翌平成 24 年 5 月に NPO 法人郡山ペップ子育てネットワーク」が設立法人では、震災が子供たちを取り巻く環境や心身にどのような影響を及ぼしているかなど、10 年に亘る調査研究を実施。その間、発見された問題の解決のため 4 つのアプローチを実施。

① 身体のケア事業

施設内での食育イベント、食に関わる各種セミナーの開催

② 心のケア事業

臨床心理士に相談できる機会を遊び場内に開設

③ 人づくり事業

発育発達の特性理解に加え、子どもが体を動かす楽しさ、心地よさを実感できる実技を体験できる研修会を、幼保小中の教員、保育士や、医療関係者などに毎月実施している。

④ 居場所づくり事業

平成 26 年から郡山市の委託で「郡山市元気な遊びのひろば」として運営を行っている。

収益の大半は寄付金と業務委託費で、費用を賄っている。

震災を因とした原発事故の放射線環境下で、屋外で遊ぶことのできない子供たちをどう育てていくかという、通常では考えられない状況から必然的に生まれた施設だと感じた。本市にその経緯を当てはめることはできないが、子どもたちが心身ともに健康で、安心して育つ環境としては、本市にも是非あってほしい施設だと感じた。